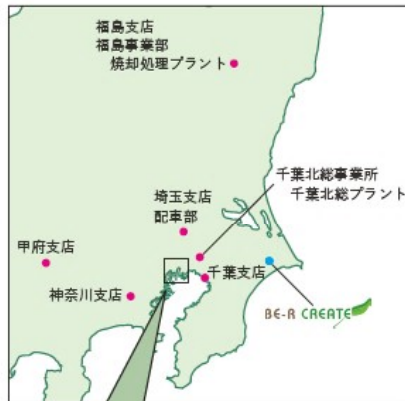


100年企業へ!

適正処理で任せて安心



江東支店
新砂事業部
改質固化処理プラント

新砂事業部
廃水処理プラント

株式会社
京葉興業本社

ステーション・あーる
市川支店
ケーヨーテクノサービス

三和清運 株式会社



サステナビリティ レポート

お問い合わせ 〒133-0061 東京都江戸川区篠崎町一丁目2番6号 TEL: 03-3678-0111

<https://www.kelyokogyo.co.jp/>



KEIYOのサステナビリティ

京葉興業グループは2022年度には新たな中期経営計画もスタートし、コロナ禍やエネルギー等の物価高騰など不安定な社会情勢の中で、力強く業務遂行しております。廃棄物処理業は社会の動脈・静脈を循環させる社会インフラとして欠かせない事業であります。昨今では産業活動の多様化・高度化や社会生活の成熟化など、環境問題が地球規模で広がりを見せています。廃棄物処理分野においても単に処理処分だけでなく、循環型社会構築のためのリサイクル処理や環境負荷の低減等、処理システムの高度化ならびに付加価値等の構築に取り組んでいかなければなりません。

当グループは、「快適な環境と自然との共生」をスローガンに、資源循環及び適正処理の担い手としての自覚と責任を持ち、時代の要求をいち早く察知しながら地球環境負荷の低減と循環型社会への貢献に努め、地域社会ならびに顧客から「任せて安心」と信頼され、必要とされる企業を目指し、2014年に創業50周年を迎え現在に至っております。今後100年企業を目指すにあたっては、多様な人材が活躍し、社会環境の変化に対して自己変革していきけるイノベティブ企業に進化していく必要があります。

そこで、内部組織である環境委員会が当グループ全体でのSDGs達成に向けた取組を推進してきました。この環境委員会では、経営・管理職階の社員のみならず、若手社員も中心メンバーとして参加しており、組織に活力をもたらしています。さらに、2022年には、新たに千葉北総事業所を立ち上げ、これからの京葉興業グループのサステナビリティを牽引する事業所として操業を開始します。

今後もチャレンジ・変革していくべき課題はありますが、ぜひ本レポートを最後までご覧いただき、当グループのサステナビリティに対する考え方や取組方針について、ご理解ならびにご協力とともに、忌憚のないご意見・感想をお寄せいただければ幸いです。今後の京葉興業グループに是非ご期待ください。



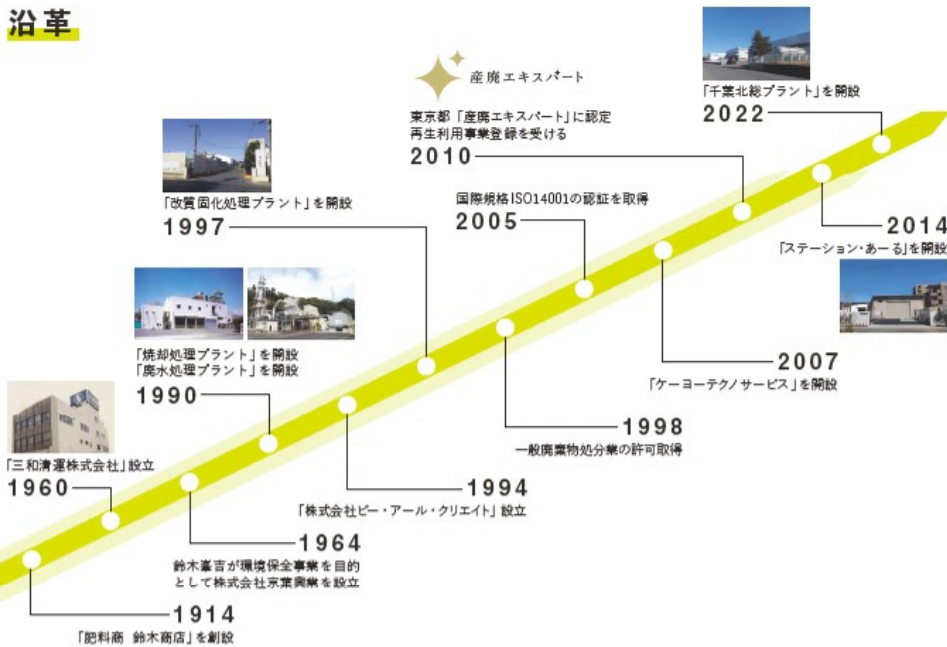
株式会社京葉興業
代表取締役
鈴木宏和

—100年企業を目指して—

ここからは、私たち KEIYO SDGs チームが
グループの取組を紹介していきます!



沿革



KEIYO グループの事業とステークホルダー



KEIYOの事業と社会貢献

廃棄物処理って、単に廃棄物を処理するだけでなく、再び資源として利用できるように循環型社会の要となっているのね！

プラントでは太陽光発電やバイオマス発電、バイナリー発電を行って、施設で使用する電力を生み出しているね！

廃水処理プラント

処理工程においてメタン発酵を行い、バイオマス発電を実施しています。処理後残渣は2%と低水準を実現しています。

地域清掃活動

最終処分

資源循環を前提としつつ、どうしても再利用できないものは法令・条約に基づき、然るべき管理のもとで埋立処分をしています。

自動車整備工場

KEIYOグループが有する多種多様な運送車両の整備ノウハウを自動車整備ソリューションとして提供しています。

千葉北総プラント

設備の安定稼働及び事故防止の基礎情報となる、受け入れる廃棄物の成分管理を強化しています。このほか、太陽光発電の実施、電動化に着手するなど、省エネ・CO₂排出削減にも取り組んでいます。

モーダルシフト

浄水場、下水処理場の清掃作業

公園の草刈、清掃作業

家庭ごみ収集・運搬

改質固化処理プラント

処理後は適正処理や資源循環、モーダルシフトによる省エネ・CO₂排出削減に取り組んでいます。また、地域清掃活動や事業所周辺の緑化活動にも取り組んでいます。

災害廃棄物の受入

地震等大規模災害時における災害廃棄物の処理等に関する協定を自治体と締結し、緊急時における事業継続及び早期復旧を支援しています。

動物園やレストランの汚泥回収・処理

道路清掃

ステーション・あーる

受け入れた廃棄物はスピーディに選別し、次の処理工程に循環させています。これにより、近隣住民への臭気対策にもつながっています。

仮設トイレのし尿処理

堤防維持管理

ビー・アール・クリエイト

食品工場等の有機性産業廃棄物を受け入れ、ゴルフ場や農地で利用される肥料を生産・販売しています。

ここにも、そこにも！
KEIYOグループの事業は社会の資源循環をぐるぐる回すインフラになっているよ

焼却処理プラント

プラント周辺の地域住民の皆様には、安心して過ごしていただけるよう、定期的なコミュニケーションを実施しています。プラントでは、焼却炉の熱を利用したバイナリー発電も実施しています。

GHG 削減に向けた取組



2050年温室効果ガス（GHG）排出実質ゼロ達成に向け、廃棄物・資源循環分野においては、全国産業資源循環連合会にて、2030年におけるGHG排出量を2010年比10%削減することが目標として設定されました。

KEIYOグループでは以下の取組を通じて、2010年比10%のGHG排出削減を実現し、2050年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現に貢献します。

モーダルシフト・EV化を通じた車両の脱炭素化

環境省が取りまとめた「廃棄物・資源循環分野における2050年温室効果ガス排出実質ゼロに向けた中長期シナリオ」（以下、中長期シナリオ）において、廃棄物施設・車両等の脱炭素化は重点対策領域の一つです。

例えば、貨物輸送の方法をトラック（営業用貨物車）から船舶に転換（モーダルシフト）することで、82%ものCO₂排出量を削減することが可能となります。KEIYOグループでは、中間処理を行った後は、船舶輸送により全国各地に運搬しています。

また、2022年に新たに開設した千葉北総プラントをはじめ、収集運搬車両等の電動自動車（EV）化を順次進めています。



廃水処理プラントにおけるメタン発酵事業

廃水処理プラントでは、し尿や食品関連事業者等からの廃水・汚泥を受け入れています。処理工程では、メタン発酵によりバイオガスを生成して発電を行い、ボイラー、発電機、乾燥機でのエネルギー利用を進めています。このような有機性廃棄物のメタン発酵は、中長期シナリオにおいて、重点対策領域・地域の脱炭素化に貢献する廃棄物処理システム構築のための対策の一つに挙げられています。

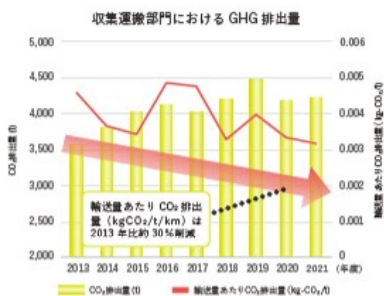
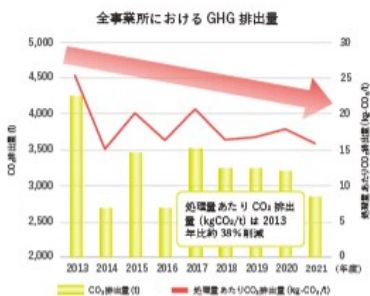
メタン発酵事業は、食品リサイクル法に基づき、優良な再生利用事業者を育成することを目的として、再生利用事業を的確に実施可能な一定要件を満たす事業者を登録する「再生利用事業登録」を取得しています。

平成19年度 環境省補助事業 二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金 (廃棄物処理施設における温暖化対策事業)	
事業の名称	(株)京葉興業 廃水処理プラント コージェネレーション事業
事業者名	株式会社 京葉興業

施設への太陽光パネル設置

KEIYOグループの施設には太陽光パネルの設置を進めており、施設で利用する電力を生み出しています。

株式会社京葉興業のGHG排出状況



※地球温暖化対策の推進に関する法律に基づきGHG排出量を算出しています。

労働安全衛生の取組



全国産業資源循環連合会では、「第2次労働災害防止計画」の中で、令和2年度からの3年間で死亡災害死傷災害を平成24～26年度実績に対し20%減少させることを目標としています。KEIYOグループでは、労働災害ゼロの実現に向けて、各事業所・各従業員の安全3（スリー）意識（当事者意識、仲間意識、プロ意識）の向上を推進し、組織に対するエンゲージメントを高め、技術スタッフと管理スタッフが一体となって労働安全衛生に取組んでいます。

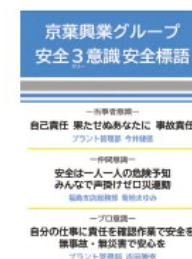
労働災害ゼロを目指す安全衛生委員会

KEIYOグループでは、労働災害ゼロを目指し、代表取締役を総責任者とした安全管理体制を構築しています。また、労働安全衛生法を遵守し、各事業所にて安全衛生委員会を毎月開催し、審議や規程の立案及び報告等を行いながら、安全衛生の推進に努めています。この際、各事業所の取組を本社安全衛生委員会が集約し、再び各事業所に共有・フィードバックする等、各事業所の安全衛生委員会を有機的につなぎ、技術スタッフと管理スタッフが一体となって、労働災害ゼロに向けた取組を推進しています。

安全大会を通じた安全3（スリー）意識向上

毎年安全大会を開催し、労働安全衛生に対するトップの想いを従業員に共有しています。各事業所における安全の取組を紹介し、各従業員や事業所の努力に対して表彰したり、アワードを与えるとともに、各事業所が相互に参考にできるよう、情報共有を行っています。

また、KEIYOグループが掲げる安全3（スリー）意識（当事者意識、仲間意識、プロ意識）に対する各事業所での議論や認識についても話題提供を行い、従業員各人が自分にとっての当事者意識、仲間意識、プロ意識とは何か、理解を振り下げ販落ちさせる機会にもなっています。



成分分析の徹底

KEIYOグループでは、①受け入れ前のサンプルの成分分析、②廃棄物受け入れ時の成分分析、③処理後の品質チェックと、廃棄物の受け入れから搬出までの各段階において、成分分析を実施しています。このような管理を徹底するのは、事前にお客様からいただいたサンプルと異なる成分の廃棄物を受け入れた場合、処理工程で機能不全が生じてしまったり、また、異物が混入されていた場合、爆発や火災の危険性があるためです。

廃棄物の成分をしっかり把握しておくことで、処理工程で必要となる薬剤の適正利用にもつながります（詳細は次項「DXによるサステナ課題の見える化」に記載）。

千葉北総プラントでは、分析ラボを完備し、提供されたサンプルや受け入れた廃棄物の成分が当日中に把握できるよう、分析管理を強化しています。こうしたデータは今後データベース化していき、千葉北総プラントを成分管理の拠点としつつ、全事業所における受け入れ廃棄物の一元管理を実現していく予定です。



DXによるサステナ課題の見える化



サステナビリティ推進には、どこに、どのような課題があるのかを適切に把握することが重要です。

これまでKEIYOグループでは、2005年にISO14001を取得し、環境委員会を通じた活動を実施してきました。しかし、スピード感をもってサステナビリティを推進していくためには、ISOに限定せず、KEIYOグループとしてのサステナ課題を把握し、取組を推進していく必要があります。

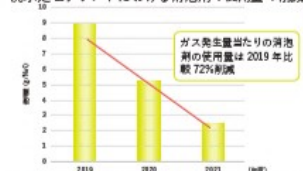
環境データの見える化による「三方よし」の実現

KEIYOグループでは、事業所ごとにテーマを決めて関連する環境データを測定し、サステナ課題の見える化に取り組んでいます。

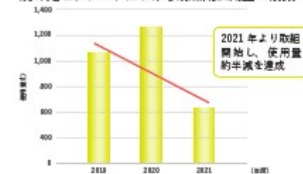
例えば、廃水処理プラントでは従来、現場作業者の経験と勘に基づき薬剤の使用量を決めていました。しかし、成分に対して本当に適正な使用量であるかを確認できていなかったり、作業によって使用量が異なるという課題がありました。そこで、適正使用に関する意識啓発を行い、使用量をデータとして作業者が閲覧できる場所に表示する等の取組をすることで、使用量が半減しました。また、焼却処理プラントにおいても、助燃材の使用量削減に取り組んでいます。

こうした環境データの見える化により、薬剤の過剰使用による労働者暴露や環境排出を低減させるだけでなく、コスト削減にもつながる「三方よし」を実現しています。

廃水処理プラントにおける消泡剤の使用量の削減



焼却処理プラントにおける助燃剤使用量の削減

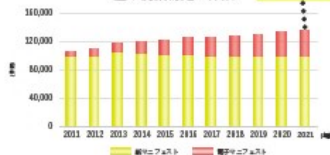


電子マニフェストを通じた廃棄物に関する情報伝達

マニフェスト制度は、産業廃棄物の行先を管理し、不法投棄を未然防止する目的で導入された制度です。KEIYOグループのお客様となる排出事業者では、収集運搬・処分業者から、マニフェストを通じて所定の期限内に処理状況を把握する必要があります。KEIYOグループでは、電子マニフェストへの対応を通じて、お客様が排出事業者責任を担保することをご支援する等、お客様のサステナビリティの推進にも貢献しています。

また、電子契約や電子請求への取組を進め、更なるデジタルトランスフォーメーション(DX)に邁進しております。

産業廃棄物処理件数



災害時の速やかな復旧・復興への貢献



KEIYOグループでは、災害廃棄物の受け入れ・処理を行うことができます。通常時における社会の資源循環に加え、こうした緊急時においても社会の資源循環を途絶えさせず、適正に処理を行うことで、災害による公衆衛生の悪化を低減させ、生活環境を保全するとともに、速やかな復旧・復興の実現に貢献します。

地震等大規模災害時における災害廃棄物の処理等に関する協定

KEIYOグループでは、自ら事業継続計画(BCP)を構築して、東京都23区や各都道府県の産業資源循環協会と災害時における協定を締結し、地震等の大規模災害発生時に発生した災害廃棄物の処理等を受け入れることができます。

これにより、緊急時においても行政サービスや企業の事業が途切れずに継続することが可能となり、また、途切れたとしても早期の復旧が可能となります。KEIYOグループは、緊急時における社会・経済の「循環」を支える役割を担っています。

お客様・取引先との関わり



社会における資源循環の担い手として、排出事業者であるお客様、リサイクル資材の受け入れ先となる取引先に対して、も、然るべき情報公開を行い、受け入れた廃棄物を適正に処理している事をお伝えしています。徹底したコンプライアンス態勢、丁寧な情報公開を通じて、KEIYOグループでは「任せて安心」と感じていただけるように以下の取組を実施しています。

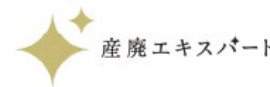
施設見学の受入

新たに廃棄物を受け入れる際には、排出事業者となるお客様に対してKEIYOグループの施設を見学いただき、適正な処理の実施のほか、GHG排出対策や環境への取組等についてご説明をしています。

KEIYOグループのプラントをご紹介するビデオも新たに作成し、お客様を中心に視聴いただけます。

優良産廃処理業者として認定

KEIYOグループは、コンプライアンス遵守の取組、労働安全衛生の取組のほか、これまでコツコツと取り組んできた環境や地域との活動が認められ、産業廃棄物処理法に基づく優良産廃処理業者及び東京都産廃エキスパートに認定されています。



地域活動を通じた信頼醸成



KEIYOグループは、地域に根差す事業所としてさらに発展するため、事業所周辺の清掃活動を定期的実施しています。こうした活動を通じて、事業所を設置する地域の皆様に対して、一般にNIMBY(Not In My Backyard)と呼ばれる施設に対する不安を払拭し、相互コミュニケーションの機会を設け、KEIYOグループの事業や従業員を信頼いただけるよう、努力をしています。

事業所周辺の清掃活動の実施

新砂事業部では、毎月第3金曜日に、江東区アダプトプログラム事業「こうとうまち美化応援隊」として事業所周辺の一斉清掃に取り組んでいます。このほか、毎年春と秋に実施される江東区「みんなでまちをきれいにする運動」を通じた新砂3丁目南部自治会事業所合同清掃にも積極的に参加しています。

福島事業部でも、操業当初より工場周辺の道路の清掃活動も月1回の頻度を自発的に実施しています。また、工場周辺に植栽を行い、季節のお花を楽しめるようにする等、地域活動に積極的に参加し、地域に根差す事業所として信頼いただけるよう努めています。



地域住民との意見交換会の定期開催

事業所周辺の行政機関や地域住民の皆様とは、意見交換を定期的開催し、丁寧なコミュニケーションをコツコツと開業してきました。廃棄物処理施設を設置・操業する際には、地域住民の方から不安の声をいただくこともありますが、地域住民からいただいたご意見を真摯に受け止め、すばやく対処することを繰り返し実施する中で、信頼を得てきました。

KEIYOグループでは、引き続きこうしたご意見を受け止め、行政機関・排出事業者・地域住民の皆様と「四位一体」となって、「任せて安心」と感じていただけるよう、丁寧なコミュニケーションを図りながら、信頼の醸成に努めていきます。



京葉興業 SDGs チーム 特別座談会

「見える化」と「対話」で未来を変える！

2005年のISO14001取得に伴って発足した京葉興業の環境委員会。三浦義博常務が「改革」を掲げ、SDGsチームを立ち上げたことで、その活動は近年活発化しつつある。環境委員会のスピノフプロジェクトである同チームの6名が、持続可能な社会の実現に向けて京葉興業ができること、そして今後の課題について話し合った。

廃棄物の処理～資源循環で必要なのは製造業の視点

——三浦常務はつねづね、京葉興業の業務は処理業ではなく製造業と考えているそうですね。

三浦 私たち京葉興業は「適正処理」を推進しています。適正とは的確な判断を行うという考え方であり、廃棄物が発生したときからその成分を把握し、どのような方法を用いて資源循環を達成するかを計画的に行うことです。このように、動脈産業と同等の発

想で進めることが重要と考えます。一方で、事前にいただくサンプルと、実際に運ばれる廃棄物の成分が必ずしも一致しているとは限りません。実際に搬入される、廃棄物の成分をしっかり把握できていれば、処理工程でムダや事故リスクを減らせます。

——確かにギャップが起こる可能性はゼロではない……。むしろ、かなり高そうな気がします。

三浦 実際にギャップが原因で、産業廃棄物施設の火災や爆発、硫化水素の発生などがニュースになることもあります。そういった事故を防ぐ手段の一つが分析です。処理後物をセメント工場へ搬出したりますが、これは我々にとってまさに製品であり、製造業の視点に立って品質を担保しなければならぬのです。

データを「見える化」し大きく変わった意識

——製造業はコストにもシビアでなければなりませんが、視点の変化で変化が起きた業務はありますか。



事業開発部環境管理課 課長 岡留雅一

中野 廃水処理プラントでは薬剤の適正な使用量を数値化し現場で共有したところ、これまで人によってまちまちだった使用量が均一化され、月に多いときは90缶ほどだった薬剤の使用量を半減以下に抑えることができました。「見える化」がコスト意識の向上につながったと思います。

——「見える化」とデータの共有は、京葉興業の新たな強みになっていきそうですね。

駒村 事業内容はすでに十分私たちの強みとなっていますが、これまで

はそれを示すツールがありませんでした。今回のようなレポートがあることで、「見える化」によって私たちの事業そのものがSDGsに貢献していることに気づいてもらえるようになるのだと思います。

ディア「SDGsって何？」から始まった取組について社内で話し合うことで、一人ひとりの意識が向上しつつあるのを実感しています。初動は苦労しましたが、今後の変化は個人的にも楽しみなところです。

サステナビリティの意識を若手の参画で次代につなぐ

——風通しがよく意見交換しやすい社風が魅力ですが、SDGsチームでもその点は生かされていますか。

三浦 サステナビリティの取組を通して、より意見を発信しやすい環境をつくることも今回の目的には含まれています。意見を発信できることで社内のモチベーションが上がり、スキルアップにもつながる。それが常態化するのがベストです。

鶴丸 私は社内の安全活動にも並行して取り組んでいますが、安全管理に関するよいアイデアを持っている若手が、部署の生産性を優先するあまり意見を出せずにいるのを何度も

見てきました。この状況を打破して部署を超えた対話の場を増やしたいと考えていたところに、三浦がコミュニケーションを活性化させるプロジェクトを立ち上げた聞きつけ、立候補して参加しました（笑）。

——SDGsプロジェクトに参加し、変化を実感したことはありますか。

鶴丸 業界や行政とも広い人脈を持ち、処理場周辺の住民との調整なども行ってきた三浦のような人物と話をする機会が増えたことで、社内の安全管理の仕事が社会問題を解決する取組を支えていることを実感でき、モチベーションは以前よりもはるかに上がりました。

——岡留さんは2005年のISO14001取得時から環境委員会に在籍しています。今回のレポートに、どんな思いで取り組んでいるのでしょうか。

岡留 当時からのメンバーは私だけなのですが（笑）、世の中の環境に対する意識が大きく変わっていくなかで、今回のようなレポートがあったらよいのではないかという考えはずっと前から持っていました。「持続可能な社会」が叫ばれる前から、京葉興業がそれと向き合ってきたことを形に残してアピールできる機会



安全管理課室長 鶴丸勝利

ができたのはうれしいことです。

——データを「見える化」することで、業務やコストのスリム化も進んでいます。

岡留 データを生かすことで普段の業務に変化が訪れていることは素晴らしいと感じています。この意識が横に広がっていくといいですね。

三浦 さらに言えばサステナビリティの取組を次代の縦軸にもつないでもらいたい。そのために、今後若い世代の参加に期待したいですね。

(談)

SDGs チームは今後も課題に向き合います！

社内でのポスター掲示など常に意識を高める工夫を

SDGsの目標アイコンを当該機器に貼るなど、SDGsやサステナビリティを業務に結びつけ、ポスターの掲示などで内外に持続可能な社会へ向けた取組を宣言したいです。



廃水処理プラント 中野 楓

長期ビジョンを意識し取組を誇張しない

SDGsウォッシュ*に陥らないためにあまい表現を使わず、自社の事業がSDGsのどの目標に貢献できるか明確化し、達成に向けて長期的ビジョンで取り組むべきだと考えます。



事業開発部 環境管理課 ディアアユ ヘルマタサリ

部署間同士の理解を深め問題意識を共有する

サステナビリティへの課題を共有すると同時に、他部署が何をしているのか、会社としての目標が何なのかなど、一人ひとりが「京葉興業を知る」ことが必要だと感じています。



新設事業部 廃水処理課 駒村恵美

*SDGsウォッシュ……SDGsに取り組んでいるように見えて、実態が伴っていないビジネスのことを指す言葉。広告などで環境に良いように思いこませる「グリーンウォッシュ」が元になっている。